

課題を身近にとらえ
新しい力を
生み出す力が必要に!

世界課題の解決に向けて これからの若者に求められること

新興国の発展と人口の爆発的増加に伴う食料問題や水問題、さらにすでに大きなトピックとなっている地球温暖化問題や環境破壊など、今、世界には解決すべき課題が山積している。これからの世界では、公的セクターのみならず、民間企業でもこれらの課題に取り組む人材が求められていくという。そんな時代の変化を見据えた進路指導のポイントとは？

取材・文／伊藤敬太郎

政府の経済的な力が弱体化する一方で 企業が担う社会的役割が大きくなっている

世界的な食料問題や環境問題に取り組むのは、政府や国際機関、あるいはNGOなどの役割というイメージがまだまだ一般的かもしれない。しかし、今、時代は大きく変わりつつある。企業に向けて社会課題解決型ビジネスを提案するデロイト トーマツ コンサルティングの藤井剛氏はこう語る。

「かつては社会課題を解決するのは主に国の仕事でした。しかし、先進諸国が財政難に苦しむようになり、今は国の力が弱くなっています。そこで、NPOやNGOの存在もクローズアップされていますが、世界的に、今後は企業が果たす役割が大きくなっていくだろうとみられています」

現実には、今、政府や国際機関などの公的セクター、NPO／NGO、そして企業が連携した社会課題解決プロジェクトが世

界各地で展開されている(図1)。NPO／NGOは現場に深く入り込み、課題に精通している。一方で、企業には課題解決につながる技術や新しい仕組みを創り出すためのノウハウがある。公的セクターのリーダーシップもやはり重要。課題が複雑化するなか、このような連携が今や不可欠になっている。

では、なぜ利益追求を目的とする企業が世界課題の解決に乗り出しているのだろうか？ 以前から、利益とは別に、企業も社会の一員として貢献的な役割を果たしていこうという考え方(=CSR〈企業の社会的責任〉)はあった。しかし、藤井氏はすでにCSRを超えた考え方が求められているという。

GEは環境ビジネスに取り組み 1兆円を超える事業成長を実現

「グローバル競争が激化し、すでに存在している市場は飽和

図1 社会的課題に取り組む3つのセクター

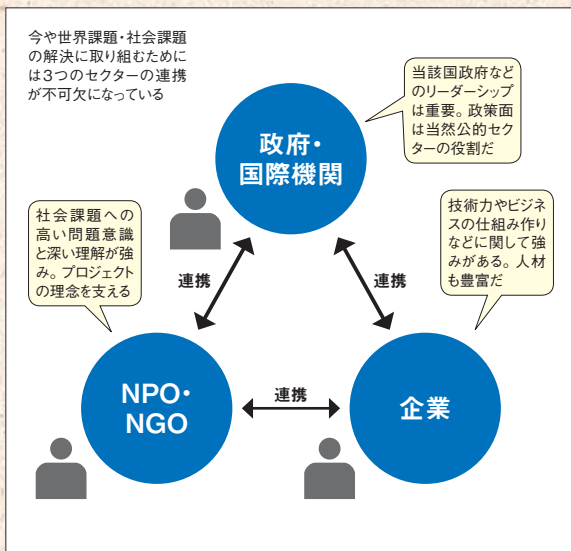


図2 CSRとCSVとの違い

| CSR Corporate Social Responsibility 企業の社会的責任 | CSV Creating Shared Value 共通価値の創造 |
|--|---|
| 価値は「善行」 | 価値はコストと比較した経済的便益と社会的便益 |
| シチズンシップ(市民性)、フィランソロピー(慈善)、持続可能性 | 企業と地域社会が共同で価値を創出 |
| 任意、あるいは外圧によって | 競争に不可欠 |
| 利益の最大化とは別物 | 利益の最大化に不可欠 |
| テーマは、外部の報告書や個人の嗜好によって決まる | テーマは企業ごとに異なり、内発的である |
| 企業の業績やCSR予算の制限を受ける | 企業の予算全体を再編成する |
| 例えば、フェアトレードで購入する | 例えば、調達方法を変えて、品質・収量を向上させる |

出所／「CSV時代のイノベーション戦略」藤井剛 著
(マイケル E・ポーター、マーク R.クラマー「共通価値の戦略」[ハーバード・ビジネス・レビュー] 2011年6月号を元にデロイト トーマツ コンサルティング作成)

図3 さまざまな世界課題とそれぞれの現状

| | | | |
|---|---|--|--|
| <p>食料</p> <p>世界の食料需要量は2050年には対2000年比で1.6倍になる見込み(図4)。生産システムの改革と同時に、新たな流通・分配のシステムも模索されている。</p> | <p>地球温暖化</p> <p>CO2削減に向けた国際的なルール作りが進み、省エネ技術をはじめビジネスが成り立っている分野。温暖化は水資源の問題とも密接に関係している。</p> | <p>医療・保健</p> <p>開発途上国では病院・医師不足が原因で命を落とす人も多い。医師の育成、病気の原因となる衛生面の改善、疫病対策などで国際的な援助が不可欠。</p> | <p>エネルギー</p> <p>太陽光などの自然エネルギーへの移行は世界的課題ではあるが、国によって取り組みはまちまち。バイオ燃料の需要増が食料の生産量に影響するといった問題も。</p> |
| <p>水</p> <p>新興国の人口増加や産業の発展に伴い世界の水の需要も急速に伸びている(図5)。海水を真水に変える技術開発などでは日本企業の貢献度も大きい。</p> | <p>森林破壊</p> <p>先進国の需要を満たすための伐採で、世界では、毎年日本の国土面積の約半分の森林が失われ、砂漠化も進んでいる。アマゾンなど熱帯林の保護は緊急度大。</p> | <p>貧困</p> <p>開発途上国の貧困は飢餓、病気、教育水準などの問題にもつながる根本的な世界課題。貧困の悪循環から脱出し、自立を後押しする支援が求められている。</p> | <p>人権</p> <p>女性の権利、子どもの労働、人身売買、難民・移民、少数民族に対する偏見や差別などの問題にはアムネスティなどの組織が国際的に取り組んでいる。</p> |

状態です。今、企業は新しい市場を切り拓く必要に迫られています。社会課題解決型ビジネスはそのための企業の戦略。課題があるところにはニーズがありますから、企業にとっては大きなビジネスチャンスなのです」

この考え方は「CSV(共通価値の創造)」と呼ばれる。これからのビジネスを語るうえでは非常に重要なキーワードだ(図2)。すでにアメリカにはGE、ネスレ、ウォルマートなどCSVで成果を挙げている企業が多数でてきている。例えば、2005年から環境ビジネスに取り組んできたGEは、当初利益が見込めるのか危ぶまれたこの分野で、すでに1兆円を超す事業成長を成し遂げている。CSVは今後、日本を含む世界中に急速に拡大していくだろうと藤井氏は指摘する。

一方、NPOやNGOにも、ボランティア精神や善意だけでなくビジネス感覚が求められるようになってきている。

「課題を本質的に解決するためには、持続可能な新しい仕組みを創り出す必要があります。そのためにはNPOやNGOでも利益を生み出す発想や姿勢が求められる。善意だけでは仕組みを作っても長く維持できないですから。そのため、海外では企業からNPO/NGOに移って活躍する人材も多いですし、社会起業家を目指すエリートも増えています」(藤井氏)

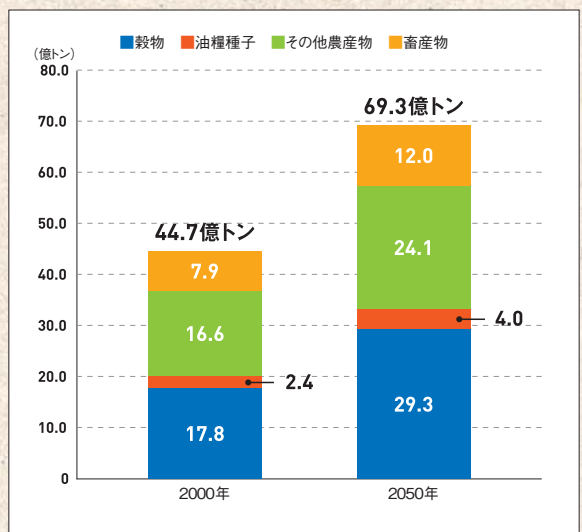
3つのセクターの連携を図る 「トライセクターリーダー」が求められている

要するに、どのセクターでも求められる人材像は似通ってきている。そこで注目されているキーワードがもう一つある。

「3つのセクターそれぞれに今求められているのが『トライセクターリーダー』。各セクターの枠内で考え、行動するのではなく、課題を全体的にとらえ、セクター間の連携を図ってプロジェクトを推進できる人材です」(藤井氏)

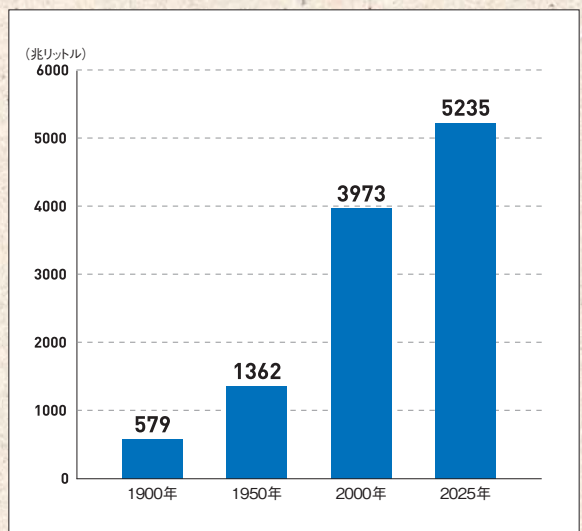
その人材像を掘り下げる前に、今、世界にはどのような喫緊の課題があるのかを整理しておきたい。図3に主なものを挙げているが、ほかにも教育や地域紛争など課題は多様だ。

図4 世界全体の食料需要量の変化



出所 / 農林水産省「2050年における世界の食料需給見通し」

図5 世界全体の水使用量の変化



出所 / UNESCO

ポイントの一つは、いずれも一つの視点からだけでは解決が難しいということだ。例えば、将来的な水不足の問題を考える場合、海水や雨水を真水に変える装置の開発など技術的なアプローチも大切だが、限られた水資源を適切に分配するための政治・経済面からのアプローチも必要になる。

また、それぞれのテーマが相互に関係していることにも注目しておきたい。例えば、食料問題は貧困、環境、エネルギーなどの問題とも絡み合い、紛争の要因となっているケースもある。そして、グローバルな課題とローカルな課題が結びついていることも意識することが必要だ。これも食料を例に挙げれば、日本の食料自給率を上げることは、世界に流通する食料を増やすことにつながる。日本のローカルな課題の解決に、海外のほかの地域の事例が応用できるケースもある。つながりのなかで問題をとらえることが大切なのだ。

「自分の手で世界は変えられる」 このマインドが課題解決の原動力に

このような課題の性質から、その解決のために必要な能力や資質も浮かび上がってくる。課題解決型のプロジェクトで一人ひとりに求められるのは、目の前の事象を客観的に分析し、問題を発見する力だ。それを支えるのは特定分野の専門性プラス幅広い視野や知識。加えて、セクターや専門分野を超えて幅広い人々と連携するためのリーダーシップやコミュニケーション能力、さらに語学力なども不可欠だ。

「それらの能力・スキルに加えて、トライセクターリーダーやそれを目指す人材にとって最も大切なのは『自分の手で世界は変えられる』というマインドです。このマインドこそが課題解決の原動力になるのです」(藤井氏)

すでに教育の世界もこのような課題解決力をもつ人材の育成に向けて動き始めている。2014年度からスタートしたスーパーグローバルハイスクール(SGH)もその一つ。図6に示したように、SGHでは、単なる語学力の強化にとどまらず、世界の課題に目を向けさせ、その解決のための視点やスキルを養うことに重点を置いた教育が実施されている。

では、課題解決型人材を目指す場合の進路指導のポイントはどこにあるのだろうか。

大学でも、国際学部、国際教養学部などグローバルな課題を幅広く扱う学部・学科が増えてきた。これらの学部・学科は当然選択肢の一つになる。ただし、世界や日本が抱える課題は幅広いため、医学、工学、化学、農学、経済学、政治学、法学、教育学など幅広い分野で貢献が可能。どの学部・学科を選ぶかは、「どのような世界課題・社会課題に関心をもっているか」「どのような方向からその課題解決に取り組みたいか」によって決まってくるといえる。その意味で、普段から国内外の具体的な課題に目を向けさせる指導が大切になる。

加えて、社会課題解決型ビジネスの今後の可能性や課題

図6 スーパーグローバルハイスクール(SGH)の取り組み

- グローバル・リーダー育成に資する課題研究(例:国際的に関心が高い社会課題)を中心とした教育課程の研究開発・実践
- グループワーク、ディスカッション、論文作成、プレゼンテーション、プロジェクト型学習などの実施(英語によるものも含む)
- 海外の高校・大学等と連携した課題研究に関するフィールドワーク、成果発表などのための海外研修
- 帰国・外国人生徒の積極的受け入れ、大学との連携を通じた外国人留学生とのアカデミックなワークショップ
- 大学との連携を通じた、課題研究内容に関する専門性を有する帰国・外国人教員の活用

**グローバルな社会課題を発見・解決できる人材や、
グローバルなビジネスで活躍できる人材
(国際機関職員、社会起業家、
グローバル企業の経営者、政治家、
研究者など)の輩出**

出所/文部科学省

解決型人材へのニーズについての情報を提供し、生徒の視野と選択肢を広げることも求められるだろう。

最後に課題解決力を養うための高校・大学での過ごし方について、藤井氏は次のようにアドバイスする。

留学、ボランティア、フィールドワークなど 現場を体験する機会の豊富さも重要に

「複雑な問題を分析するための幅広い知識を学生時代に一気に身につけようとしても難しいでしょう。高校・大学時代は、自分が関心を抱いているテーマに深くかかわることがより大切です。そこで生まれる問題意識が学ぶことへのモチベーションになります。例えば、学生がNPOの活動に参加するチャンスはいくらでもありますし、社会起業家など各分野のリーダーと交流することもSNSが普及した今の時代なら十分可能。現場や人から多くのことを学んでほしいですね」(藤井氏)

そのため、留学や研修、ボランティア、フィールドワークなどを通して実地で体験する機会が豊富なことも大学選びの重要な視点になるだろう。いずれにせよ、大学進学はあくまでスタートライン。受動的な学びでは課題解決力を養うことはできない。その環境で自らどのようなアクションを起こせるかがカギを握ることも生徒にしっかりと伝えておきたい。